

第29号

2014年 11月 1日

○発行
650-0004
神戸市中央区中山手通
7丁目25-38
神戸真生塾広報誌編集係
TEL (078) 341-5897
FAX (078) 341-8239
E-mail : kouhou@kbshinsei-j.org

○振替口座
郵便振替01100-8-18680

子供達の未来を祈りつつ

社会福祉法人神戸真生塾 評議員
横須賀学院小学校 音楽科講師

山田 篤子



「おはようございます」と、
堰を切ったように走って音楽室
に入ってくる子供。「今日はほ
くが一番!」と、さらさらした
日、はりきった顔で自慢げ。そ
して次々と子供達がやってきて
席に着きます。授業のはじめに
は毎回交代で二人の子供が一曲
ずつさんびかのリクエストをし
て、みんなで歌うことから始め
ます。リクエストの一番人気は
クリスマスさんびか「あらら
のはてに」です。軽快でなめら
かなフレーズ「グロリア イ
ンエクセルシデオ」を二回単
純に繰り返す部分が子供達には
魅力があるようです。二番目に
人気があるのは「小さいひつじ
が」(讃21・二〇〇)で百匹の
羊を持っている羊飼いが、その
一匹が迷い出た時、九十九匹を
山に残して迷い出た一匹を捜し
に行くという聖書の中のとえ
話の曲です。野原に遊びに行っ
てしまった無邪気な一匹の子羊
は帰る道が分からなくなっ
てきました。あたりは暗くなっ
てきました。この子羊はどう

なってしまうのでしょうか。子供
はドキドキしながら四節までこ
の物語を歌っていきます。やさ
しい羊飼いが子羊を見つけて
「この子羊は喜ばしさに踊りま
した」と終わるこの曲は、子供
達にスリルと安心感を与えてく
れるようです。この「子羊」と
いう言葉を各自自分の名前に置
き換えて歌ってみると、最初は
歌いにくそうでも、まるで迷子
になった自分を神様が捜し求め
て温かい手で包んでくださるの
だというメッセージを実感し、
満足できる瞬間になるのです。

私は神奈川県にあるミッショ
ンスクールの小学校で音楽を教
えています。子供達の持つパ
ワー、エネルギーには時に負け
てしまいそうになります。その
子供達から、実はいつの間にか
私自身が生きるエネルギーを頂
いていることに気付かされるの
です。連日のように報道されて
いる数々の災害。また、最近で
は神戸での少女の痛ましい事件
は、私共の心を震わせるもので
した。これから未来に向かって
平和や希望を見出すのは大変
困難な時代のように思われま
す。もちろん、各々の子供達の
背後にある家庭環境も様々で

す。ひとり親の家庭や、両親と
暮らすことのできない事情にあ
る子供は、私の教える学校でも
少なくはありません。「元気に
成長し、たくましく生き抜いて
いってね」と祈る気持ちで授業
のひとこまひとこまを過ごして
います。

私は自分が子供だった頃、母
に連れられ、神戸真生塾の敷地
の中にあつた祖父母の家を何度
となく訪れました。神戸真生塾
の門から入ると聞こえるにぎや
かな子供達の声と生活の音、日
常生活が営まれている温かい空
気を感じ、奥へ進んでいくと右
側の建物の窓際に座っている祖
母、愛子の笑顔に会うことがで
きるのです。祖父母の家で二人
がゆつくり家にいたという記憶
はありません。特に祖母に会え
るのは夕食以降の遅い時間帯で
した。朝になると「お母さん、
行ってきます!」と学校へ登校
する子供達の元気な声が次から
次へと聞こえていました。

長い時を経て今年の春、夫と
共に初めて真生塾の卒業を祝う
会に出席させていただきまし
た。卒園、卒業をする子供達、
とりわけ高校を卒業して真生塾
を巣立っていく五人の子供達か
らは、幼少時代から真生塾で
育ってきた気持ちで率直に語ら
れ、ひとり一人が心に持ち続け
てきた想いに直接触れることが
できました。様々な経験、想
いを乗り越え未知の世界へと巣立
とうとしている子供達に、お兄
さんお姉さんと呼ばれている職
員の、迷子になったらいつでも
温かい手で包んであげるよ、と
の気持ちで送り出す真生塾の温
かさは、私がかつて子供の頃に
感じたものと何一つ変わらない
ものでした。

子供は今という瞬間を、たく
さんのエネルギーを使いながら、
現在進行形で一生懸命に生きて
いると思います。何をしようか、
何を発見しようか、あるいはど
う楽しもうかと。しかし、成長
するに従って、現在だけではな
く未来にある未知の自分を考え
なければならぬ現実はどこか
で直面します。共に生活をして
いる仲間たちとの切磋琢磨や職
員の方たちの支えを得て、日々
営まれている単純な生活の繰り返
しこそが、真生塾の子供達の
未来を支えているような気がし
てなりません。どんなに困難な
状況に置かれても、真生塾で育
んだ愛を信じ、また、創造主で
ある方の愛を信じて生き抜く力
を得ることができまますようにと、
真生塾で暮らす子供たちひとり
一人のことを遠くの地より祈ら
せて頂きたいと思えます。

子供は今という瞬間を、たく
さんのエネルギーを使いながら、
現在進行形で一生懸命に生きて
いると思います。何をしようか、
何を発見しようか、あるいはど
う楽しもうかと。しかし、成長
するに従って、現在だけではな
く未来にある未知の自分を考え
なければならぬ現実はどこか
で直面します。共に生活をして
いる仲間たちとの切磋琢磨や職
員の方たちの支えを得て、日々
営まれている単純な生活の繰り返
しこそが、真生塾の子供達の
未来を支えているような気がし
てなりません。どんなに困難な
状況に置かれても、真生塾で育
んだ愛を信じ、また、創造主で
ある方の愛を信じて生き抜く力
を得ることができまますようにと、
真生塾で暮らす子供たちひとり
一人のことを遠くの地より祈ら
せて頂きたいと思えます。

社会福祉法人 神戸真生塾 題字 齊藤 敬好



《児童養護 神戸真生塾》 琵琶湖キャンプ



六月。「今年はどうなキャンプにしようか・・・」と係での話し合いを開始しました。昨年はサイクリングや滝を見に行くハイキング、近隣の大型児童館、こどもの国への外出など、様々なプログラムを試み、子どもたちにとっても楽しいようだったので今年もそうしようかとも考えました。しかし今年はず年と大きく違うところが二つ。一つ日は乳児院のことも私たち五名と職員三名が参加することになったこと。そして二つ日は養護施設の子どもの中にも「びわこキャンプは今年初めて」という子どもが複数いたこと。ということ、今年はず湖での水泳を思い切り楽しもう！ということになりました。

お天気にも恵まれた二泊三日。水泳の他にも、スイカ割り、花火、キャンプファイヤー、肝試し、バーベキュー、子ども会主催のチーム対抗障害物リレー&女装大会など、楽しいプログラムが盛りだくさんでした。水泳時間には、泳ぐだけでなく、魚を捕まえたり、ボートに乗ったり、身体を砂に埋めても

らったりと、あっちでもこっちでもはしゃぐ声が耐えられません。驚いたのは、湖に初めて入る小さい子どもたちも水や波を怖がることなくとても積極的だったことです。底に石がゴロゴロしていたって、多少波がきたって、顔に水がかかったってへっちゃらでした。



勇気ある

者が参加する肝試し。電気も懐中電灯も消し、ろうそくの明かりのみになったメインキャンピングに心臓をドキドキさせて集まる子どもたち。「やめておきなうら今のうちだよ・・・」という一言に、「やめる」「私もやめとく」と早くもリタイヤする者が数名。寄せ合います。富川施設長からの怪談話を聞いたあと、おぼけたちが待ち構える外へと向かいます。その後・・・静かな琵琶湖のほとりに悲鳴と泣き声が響きわたったのは言うまでもありません。逃げ出したい恐怖心と

戦い、おぼけと戦い、靴が脱げてもゴール目指して猛ダッシュの末、「全然怖くなかったし」との感想。

この限られたスペースではほんの一部分しかお伝えできませんが、三日間の中で、何事にも全力で楽しむ子どもたちの姿、ひとこま、ひとこまが微笑ましく、また逞しくもありました。

乳児院の小さな子どもから、今年でキャンプは最後だった高校生の大きな子まで、職員と子どもが朝から夜まで同じ空間で同じことをして、楽しい時間を共有できたことを嬉しく思います。日常から離れた野外活動は本当に素敵な行事であると改めて感じました。

(伊達)



YMCAキャンプ



今年の夏も中高生は六甲山YMCAにご招待して頂きました。一日目は池の上でカヌー体験をさせて頂きました。真つ直ぐに漕ぐのも難しく、チームワークがとても大事で、みんな協力して漕ぎました。慣れてくると一人でカヌーに乗る子どもたちも出てきて、習得のはやさに驚きました。

夕食は恒例のバーベキュー。自分たちで野菜を切ったり炭をおこしたり；お肉や海鮮といった目の前に並ぶご馳走に、目を輝かせていました。しっかりとみんながお手伝いしてくれたので、スムーズにいき「美味しい！美味しい！」と満腹になるまで食べました。

夜は花火・肝試しをしました。線香花火で誰が最後まで火を落とさないかと勝負をしたりして楽しみました。肝試しでは怖い話の途中に怪奇現象（仕掛けたものではない）が起きて、職員も子どもも震え上がっていました。

二日目は朝から雨がパラパラしていましたが、ハイキングを行いました。目的地に着くころ

には青空が広がっており、神戸の景色もきれいに覚えて皆で集合写真を撮ることが出来ました。昼食には、ピザ作りをしました。食材を切って、ピザは生地から作りました。粉で顔が真っ白になったりしながら作ったピザを窯で焼いてもらい、アツアツの出来立てを頂きました。子どもたちからは「こんなに美味しいピザを食べたのは初めてだ！」という声もあがりました。

(中道)



納涼大会



残暑が厳しい中迎えた八月二十三日土曜日、子どもたちが楽しみにしていた納涼大会が開催されました。当日は天気にも恵まれ、会場には子ども達のご家族、学校の先生方、里親さん、地域の方々、神戸真生塾の退所生等、たくさんの方々に足を運んでいただき、とても良い雰囲気で行うことが出来ました。

ステージ発表では、乳児院の子ども達、養護の子どもたち、職員が参加し、活気溢れる舞台となりました。特に子どもたちは、当日のために数か月前からボランティアでヒップホップを教えて下さる方々の指導の下で、一生懸命練習に取り組みました。



練習が難しく、苦戦している子ども達もいましたが、暑い中最後まで取り組み、真剣な姿を見せてくれました。

乳児院の子どもたちは「ポップンポップコーン」「アンパンマン音頭」を披露してくれました。とても可愛らしい姿が印象的でした。養護の子どもたちは「妖怪ウォッチ」「UPPER HOPES」を披露し、本番では練習の成果を精一杯発揮してくれました。また、ステージ発表はダンスだけでなく、○×ゲーム、お笑い、うたっこクラブによる合唱等、様々な楽しいプログラムで会場を盛り上げてくれました。中高生がステージの司会を務めてくれたりゲームの問題出題をしてくれたりしながら子ども達全員で協力してくれたおかげで良いステージ発表となりました。厳しい練習を乗り越え、本番で成果を発揮することが出来たという事は子ども達の自信にも繋げることが出来たのではないのかなと思います。

楽しいステージ発表が行われている中、模擬店ではかき氷や

焼きそば、たこ焼き、フランクフルト、がらくた市等、計十三店を出店しました。どの模擬店も大盛況であり、完売する店もありました。子どもたちが美味しいものを食べながら楽しんでる姿がとても印象的でした。

今年もこのような納涼大会を開催することが出来たのも、関係機関の方々、家族の皆様、里親の皆様、地域の方々、ボランティアの方々等、たくさんの方の温かいご支援とご協力があったからこそ実現することが出来たのだと思います。皆様方のお陰で子どもたちのたくさんの笑顔を見ることが出来、今年の納涼大会も成功に収めることが出来ました。



神戸真生塾の施設の片隅にあるスペースに、ミツバチの巣箱が設置されて三年目になりました。ここで採取された蜂蜜、神戸真生塾のファンも定着してきたのか、いろんな場面でお会いする福祉関係者の方々、ロータリー子供の家の地域支援を利用する皆様から「ミツバチ元気？」とお声をかけて頂くこともしばしばです。「そうやね、最近かわいがっていたいたミツバチのハッチが機嫌悪くて、近寄っただけで怒りますねん」と冗談を言いながら、本職の子どものお世話と重ねて施設の子どものとの関係を考えることがあります。

ミツバチさん、いつもありがとうございます



のミツバチも傷つけずにその日の状態を配慮して大切に扱うことが鉄則、との採蜜の師匠の教えを無視した結果、何十匹ものミツバチが一斉に飛びかかって私を襲ってきたのです。初めての経験でした。

子ども達との関わりの中で、日常の忙しさから、接する時の表情・ちょっとした言葉掛け・態度の配慮のなさから生じる子どもとの関係性を、腫れた皮膚を見ながら考え直すことになりました。この度の事が子供との摩擦でなくて良かったとホッとしています。

これからはお世話に慣れることなく、初心に戻りたいと子どもとの関わりも含めて反省する次第です。

夏の納涼大会では、NPO法人「B&F神戸真生塾支部」から今年も蜂蜜の販売をさせて頂きました。

その日、ミツバチが群がる巣の標本を展示しながら販売する為に、納涼大会の準備に慌てながら、何千匹も入っている巣箱に声の一つも掛けず、蓋を開けて取り出そうとした時です。

本当は「いつもご苦労さん。ありがとうございます」と言葉を掛け、作業していく事が最優先、一匹



(秋本)

児童養護施設卓球大会

六月二十九日、王子スポーツセンターにて第六十回兵庫県児童養護施設卓球大会が行われました。参加を決めてから実際に練習を始めるまでに時間が空いてしまい、試合当日まであまり練習ができませんでした。また団体戦に出場する子ども達は、一チーム三名の小中学生混合

チームを作らなければならぬにもかかわらず、誰と誰が同じチームになるかということで見がまとまらず子ども同士で言い合いになってしまいうこともありました。しかし練習中は卓球部の中学生が小学生に打ち方のコツを教えたり、高校生が卓球経験の少ない小学生の練習に付き合ってくれたり和気藹々とした雰囲気の中で練習ができました。卓球をあまりしたことのない小学生も、中学生の指導のおかげでラリーがずいぶん続くようになり、試合への期待が高まりました。試合当日、団体戦に出場する子ども達はAチームとBチームに分かれ対戦相手が決まると、チームの三人でどのような順番で試合に臨めば勝るか作戦を練って試合に挑みま

した。予選トーナメントではAチームは惜しくも負けてしまいましたが、Bチームは見事勝ち抜き決勝トーナメントに進出しました。

決勝トーナメントでは、予選を勝ち抜いた強豪チーム揃いで、初めて卓球大会に出た小学生はその雰囲気委縮してしまい持っている力を出し切れず、一試合目は何とか勝利したものの二試合目で負けてしまいました。普段はとても饒舌な子ども達も負けてしまった試合の後はほとんど言葉が発することなく、本当に悔しそうでした。

今回の大会では子ども達の成長を感じる事が二つありました。一つは一度も年上の子ども達が年下の子ども達の失敗を責めなかった事です。今までは一生懸命になるがゆえに失敗してしまった子を責めてしまい、チームの雰囲気が悪くなってしまう事もありましたが、今回は「落ち着いて！」と声を掛けたり、途中で年長児が作戦を立てて年少児に伝えたりと微笑ましい場面が何度もありました。もう一つは負けた後も最後まで

で勝ち進んでいる他施設の選手を応援していた事です。例年なら負けて試合が終わってしまうとすぐに会場を後にするのですが、今年は他施設の強いチームの試合を見たいと言ひ、最後まで会場に残って強い選手の試合をよく見ていました。「あんなスマッシュ打てるようになりたいな」と話す子ども目のにはもう来年の試合が見えているのだと思います。

毎日の生活の中では高年齢の子ども達の成長を見落としがちですが、今回の大会を通してそれぞれの子どもの成長を感じられ、それが私自身の糧となった気がします。今年の悔しい思いを胸に、来年は一試合でも多く勝ち進めるよう神戸真生塾卓球部として頑張って練習に励みたいと思います。

(金岡)



ホームクッキング



神戸真生塾では、月に二回それぞれのお部屋で夕食を作るホームクッキングを行っています。そこにできる限り厨房職員も入るようにしており、今回もお部屋に入って子どもたちと一緒に調理しました。

まず、お部屋でメニューを決めます。今回は手巻き寿司、天ぷら、流しそうめんでした。子どもたちと一緒に買い物へ行き「何がいる?」「どっちのほうが安いかな?」などと言ひながら楽しく食材を選ぶことができました。

お部屋に帰り、野菜を切ったりする時には自分から「これ切りたい!」と言って積極的にお手伝いしてくれました。日ごろからよくお手伝いをしていのか、みんなとても上手に切ることができました。また、Sちゃんが硬いさつまいもを一生懸命切ってくれていた時に、それを見てAちゃんが「それ切つたるわ!」と助けてくれました。最年少のHちゃんは「手作りの流しそうめん台を作る!」と言って牛乳パックを使って一生懸命作ってくれました。

ご飯が完成し、全員そろってご飯を食べました。手巻き寿司は食材を数種類用意していたので「何を巻こうかな?」と思ひ思いの手巻き寿司を作つて楽しむことができました。流しそうめんが一番盛り上がり、少し失敗しましたがみんなで笑いながら「もう一回やつて!」とても楽しく食事することができました。

ホームクッキングを通して、買い物の仕方やご飯を作る楽しさ、大変さを学ぶことができると思います。また、食べ物への感謝の気持ちや食への興味を持つてもらえたらなと思います。

(松川)



第五十回善意の釣り大会

九月十四日に全日本サーフキャストイング連盟兵庫協会主催の須磨海岸で行われた釣大会に参加してきました。ここ三年招待して下さり、子どもたちも喜んで参加しています。

毎回、協会の会員の方々が、ほぼ一対一で子ども達に付き添って、丁寧に指導してくださいありがとうございます。そのおかげで子ども達も魚を釣ることができ、楽しい時間を過ごすことができています。小学校三年生から高校生まで参加しましたが、年齢に応じて指導もして下さり、中学生や高校生の子も達は、餌も付けられるようになって、自分の力で魚を釣り上げることができて満足そうでした。

小学校の高学年の子も達も竿の振り方もさまになっており、釣り初心者の私が「かっこいい！」と思えるような姿でした。そして、釣った魚の大きさに順位を決め、賞品もみんなにあり、三位になった小学生男子児童、五位になった小学生女子児童は大喜びで良い笑顔をしていました。楽しい時間を過ごせた上に豪華な賞品も頂き、子

も達も私達職員も感謝の気持ちでいっぱいです。子ども達は感謝の気持ちをお札状に書いて送りましたが、「楽しかった！また来年も行きたい！」「教えてくれたから、たくさん釣れて嬉しかった。」と心からのお礼を綴っていました。また、釣り終了後、順位発表の前に海岸の清掃活動もしました。このような取り組みも含め、子ども達の心身の健やかな成長に良い機会になったと思います。本当に周りの皆様に支えられて子ども達は育っているのだと改めて実感するひとときでした。

(沖野)



子どものつぶやき

☆お兄ちゃんに肩車してもらっているAちゃんに「いいね！」と声をかけると「うん。カタツムリ」と。カタツムリだよ。

(4歳・Aちゃん)

☆プールで「アナと雪の女王」ごっこをしていた時のこと。エルサ役だったAちゃんに「Aちゃんの王子様は誰かな？」「〇〇兄ちゃんかな？」と聞くとAちゃんがボソッと「普通の人間」と言いました。：お兄ちゃん、振られちゃったね…！

(4歳・Aちゃん)

☆運動会の練習の音楽を熱唱しているRちゃん。全力で「ひよっこりとーたんじーまっ」と…。ひよっこりひよっようなん鳥だよ。

(小一・Rちゃん)

☆夕食を食べて一言。「今日も美味しゅうございます」こちらこそ、いつも美味しく食べてくれてありがとう。

(小二・Rくん)

☆「不審な人にお菓子じゃなくてお金あげるって言われたらどうする？」
「うーん、お姉ちゃんにあげてって

言うわ」

(小4・Aちゃん)

☆Sちゃんが寝ているときに「もう！トイレ行くー！」と怒りだしたのでビックリして「どうぞ。行ってきてください」と言うと「……」反応なし。寝言なのね？！一体どんな夢を見てたのかな？

(小五・Sちゃん)

☆ホームクッキングで鷹の爪を使ったとき。「人間の爪も辛いんかな？」

(小六・Yちゃん)

☆「ハマグリって栗？」とYちゃん。そう思う気持ちはなんとなくわかりますが：

(高二・Yちゃん)

☆「みんなまでリビングにて寝たい」と子どもより提案があり、「夕食十九時半までに終わらせること、優しい言葉で話すこと」を条件にしたら皆きっちり条件を守り、掃除機をかけて机をどけて布団を敷く：必死な姿が本当に可愛かったよ！！

(さくら草の家の小学生たち)



《乳児院 真生乳児院》

一つの夏一番の笑顔

保育士 富澤 美香



八月七日。三田市野外活動センターへ、子ども五人（職員四人）でデイキャンプに行きました。

いつもは車に乗ったらすぐに眠くなってしまふA君ですが、この日はとても元気いっぱい目をキラキラとさせています。車に乗るなり、私と手を繋いでウキウキ。

「トラックおったなあ」
「トラックおったなあ」



「信号、緑やで！」
と、お喋りが止まりません。

ですが、キャンプ場に到着し水着に着替えると、さっきまでのA君の元気がありません。A君は水が少し苦手なのです…。川に入り友だち同士で水のかけあいになると、今にも泣き出しそうです。

「大丈夫だよ。A君、泣かなくてかっこ良かったね。」

と、励ますと嬉しそうな表情で遊び始めました。

ところが、急に水の中に座り肩まで浸かったかと思うと

「もう上がる。」

と、プルプルと震え始めたのです。いつも入浴時に、肩まで温まってから出るのですが、それを思い出して同じように肩まで浸かって…でも、水が冷たくて震えてしまったのです。

「お風呂じゃないから、肩まで浸からなくてもいいのに。」
と笑って言うと、その言葉を聞

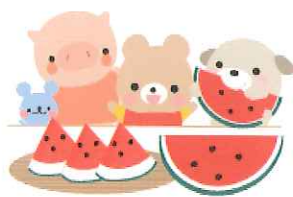
き表情がパツと明るくなったA君。水の中に出たり入ったり、好きなペースで楽しむことができました。

そして、待ちに待った昼食の時間。キャンプ場で職員が作った、飯盒で炊いたご飯と、子どもたちの大好きなカレーライスーいっぱい遊んだ子どもたちのお腹は、もうペコペコです。

カレーライスが大好きなB君。大人の大きなお皿で食べると言い張ります。大きなお皿に、たくさんのカレーライス。とてもご満悦な様子。けれども、普段は食べる頃に適温になっているご飯が、今日は出来たてホヤホヤ。職員がフーフーと息を吹きかけて冷まし…でもお腹がペコペコで、あわてて食べたB君は、一口食べた瞬間、

「あつーっー」

もう一度ゆっくり息をフウフウと吹きかけ食べ始めてもなお、熱くて食べられない様子。担当



職員がカレーとご飯を混ぜてしつかり冷まして食べさせようとしても、まだ警戒しています。ですが、完全に冷めたと納得すると本領発揮！みんながお替りをして、ワイワイ楽しく食事をすることができました。

暑い中、元気いっぱい遊んだ子どもたち。このデイキャンプを通して、水が苦手だったA君が友だちとの遊びや関わりの中でひとつ成長した気がします。また、別グループで普段関わることの少ない友だちや職員とも、車で遠出して楽しく過ごすという貴重な経験をしました。

乳児院の夏〜初秋

この夏〜初秋、乳児院では先に紹介したデイキャンプ以外にも沢山のイベントや職員のスキルアップに向けた取り組みを行いました。

特に今夏は、児童養護の大きなお兄ちゃんお姉ちゃんたちと一緒に琵琶湖キャンプ（二泊三日）に行きました。「海遶うねん湖やねん」と、ちょっと緊張しながら目を輝かせながら体験を語る子どもたち。付添いの職員も大きくなって児童養護で生活する子どもから「また一緒に寝れるなんて夢みたい」との声をもらうなど、連続性のある関わりへの思いを、新たに胸に抱く夏となりました。

その他にも、ぶどう狩りや夏祭り、恒例の運動会や大震災を想定した防災訓練と非常食の喫食など、毎月の個別保育とは異なる様々な取り組みを実践しています。

また、8月には第三者評価を受審しました。さらなる向上を目指し、複数の委員会を立ち上げたり、SIDS（乳幼児突然死症候群）の予防と緊急時の対応強化を図ったり、AEDを含めて救急蘇生を全職員がマスターできるよう努めています。

今後また季節は移っていきますが、七五三や人形劇、収穫感謝祭にクリスマス祝会など、行事が目白押しです。子どもたちのたくさんの喜びや思いに寄り添いながら、成長をずっと見守っていききたいと思えます。

《保育所 真生きりぎりす保育園》
主よ、あなたは全てを知ってあらわれる

園長 上杉 徹

立花隆氏の著書の中で「宇宙からの帰還」という、宇宙飛行士の体験談をまとめた作品がありました。今から四十年以上前にアメリカでは有人ロケットを宇宙へ飛ばして月に人類を送るという「アポロ宇宙計画」を成功させました。人間が初めてロケットに乗って宇宙に飛び出した時、宇宙から自分たちの住む地球を見て多くの宇宙飛行士たちはその美しさ、素晴らしさに驚いたと言われています。旧ソビエトの宇宙飛行士であるガガーリンは「地球は青かった」という有名な言葉を残しています。多くの宇宙飛行士は宇宙から地球を見て、その美しさから地球を見て、その美しさに帰還後「まさに神業」「地球は神さまが創造されたもの間違いない」と口々に感想を述べていました。彼らは超一流の科学者でもあったのですが、科学だけでは証明できないことを感じ取ってきたのです。人間はその神さまが創造した地上において様々なものを作り出し、生活

を豊かにしてきました。しかし、近年、東日本大震災後の原発事故や山を削ったの宅地開発後の土砂災害など人間の力の限界や、人間の能力を超えた力に脅威を感じます。もちろん、被災や被害を受けた方々の悲しみが癒され、一日も早く元の生活に戻れることを祈りつつ、自然とどの様に調和して生きていくのかを考えないといけません。神さまはすべてご存知でしょうが、我々も白らの生活だけでなく自然の中で生き、生かされていることに少しでも気付いていけるような生活を送らないといけないのではないのでしょうか。いよいよ来年の四月より『子ども・子育て支援新制度』が始まります。当園は従来の『保育所』としての役割を変わりなく子ども・子育てを支援していきます。これからも変わらず子どもたちにとって何が大切かを保護者の皆さまと共に考えていきたいと思ひます。

ぶどう狩りに行ってききました

ぶどうぐみ(3歳児)

九月に入り、厳しいと思われた残暑も東の間、朝夕の空気の冷たさに秋の到来が感じられるようになりました。季節の変化に伴い、ぶどうぐみの子どもたちも屋外で体を動かす機会が多くなっています。夏場に比べ食欲もグンと増してきて、ますます活発に日々の生活を楽しんでいきます！

さて、今回は九月前半に行われた園外での活動の様子をご紹介します！
 一つ目は「ぶどう狩り」です。秋晴れのお天気のなか、めろんぐみ(五歳児)、りんごぐみ(四歳児)の子どもたちと一緒にバスに乗ってお出かけしてきました。めろんさんやりんごさんとは比べると、まだまだ歩くのもゆっくりなぶどうぐみさんですが、一歩、一歩力強く歩いていくことができました。そして、ようやくぶどう園に到着！ぶどう棚いっぱい丸々と実ったぶどうを見て、子どもたちは「おっきいねえ！」「いっぱいある！」と口々に感想を言っていました。さあ、お待ちかねのぶどうの試食タイムです。

はじめは皮を上手にむけなかつたり、ぶどう園に住む虫たちを怖がりたりする姿も見られました。慣れてくると果汁たっぷりのぶどうの実を一口、二口と次々に頬ばっていました。なかには、口の周りがすっぴんぶどう色になっている子どもも！試食の間には一人一房ずつ、ぶどうの収穫もしました。自分で選んだぶどうを手にして、ドッシリとしたぶどうの重みを感じつつ、子どもたちは驚きとともに満足そうな表情を見せていました。そして帰路へ。帰りのバスではいつものまにかみんなくつすり夢の中：でした。美味しいぶどうをお腹いっぱい食べ、楽しい遠足となりました！

二つ目は「敬老の日の集い」でのケアセンターそよ樹への訪問です。ぶどうぐみの子どもたちは『どんぐりころころ』を手ぶりを交えて歌ったあと、みかんぐみの子どもたちと一緒に作った「コースター」を利用者

の方に一つずつ手渡ししてプレゼントしました。このコースターはリーパーシブルになっていて、片側はみかんぐみさんと制作したカラフルな「にじみ絵」、もう片側はぶどうぐみの子どもたちが星や花などの型の切り絵をのり貼ったものになっていました。のり貼りをしたとき、子どもたちからは「これ、おじいちゃん、おばあちゃんにプレゼントするねえ！」という声が聞こえてきていました。一つ一つ心をこめて作ったコースターをプレゼントしたあと、握手やタッチなど触れ合いの時間をもって、そよ樹さんを後にしました。短い時間でしたが、ほのぼのとした温かい交流のひとつとなりました。

(3歳児クラス担任 請川まり子)



(3歳児クラス担任 請川まり子)

皆様のご意見、ご要望をお聴きしています。

神戸真生塾苦情処理委員会

- 苦情受付担当者 久山 啓 (子ども家庭支援センター
ロータリー子どもの家 センター長)
森本 みずき (真生きらきら保育園 主任保育士)
- 苦情解決責任者 富川 和彦 (児童養護施設 神戸真生塾 施設長)
数田 紀久子 (乳児院 真生乳児院 施設長)
上杉 徹 (保育所 真生きらきら保育園 園長)
- 第三者委員 森光 規之 (当法人 監事)
中村 悦子 (主任児童委員 中央区山手地区民生委員児童委員)
- 苦情受付件数 平成26年6月より平成26年10月末まで 1件

ロータリー子どもの家は、児童福祉法に基づく児童家庭支援センターとして、神戸市から認可を受けています。
二〇〇五年度の四月より、従来の活動とともに、子どもと家庭についての専門相談機関として、働いています。



子育てホットライン(相談専用)

TEL.078-341-6493

神戸真生塾子ども家庭支援センター
(ロータリー子どもの家)

Homepage <http://www.rotary-kodomoioe.org/>

毎日、午前9時〜午後6時、
緊急の相談は夜間もOKです。

子育てに
困った時は
先ず電話！

編集後記

とても暑かった夏も過ぎ、過ぎやすい季節となりました。皆様のご支援をいただき、今年も神戸真生塾の毎年恒例である夏休みの行事、納涼大会や琵琶湖キャンプも無事に終えることが出来ました。各行事で子どもたちは思いっきり楽しみ、また職員も子ども達と一緒に楽しく遊びながら、夏の良い思い出を作ることが出来ました。私自身、初めて参加する行事ばかりなので、各行事で楽しむ子ども達の姿はいつも以上に輝いており、とても印象的でした。

今回も広報誌「愛」二十九号を皆様にお届けすることが出来ました。ことごとく嬉しく思います。こうして、子ども達の行事での様子や日々の様子を皆様にお届けすることが出来るのも皆様の温かいご支援、ご協力があるからこそだと思います。ご支援、ご協力頂きました皆様には心より感謝申し上げます。今後もこの広報誌を通して子ども達の日々の成長をお伝えしていけたらと思っております。今後どうぞよろしくお願致します。



(尾谷)